

4. 今後に向けて

今年度大切にしてきたことは、「子どもたちが学びを楽しいことだと感じ、意欲をもって学びに向かう姿」である。そのために、「問いづくり」から始める単元デザイン～一緒に考え、一緒に学ぶ～」を令和6年度研究テーマに据え、学校全体で取り組んできた。取り組みを進める中で感じているのは、子どもたちの学びの文脈、すなわち、「児童観」の重要性である。

昨年度より説明的な文章を研究の中心として、岡山理科大学教育学部 准教授 正木友則先生による助言と大阪府教育センターの研修の基、考えの形成をめざした逆向き設計の単元デザインに取り組んでいる。第2次での読みの視点の獲得、第3次での表現する力の獲得、この昨年度の取り組みがあったからこそ、今年度の「問いづくり」に繋がっている。子どもたちが学習に正対した問いをもつためには、作品を読むための読みの視点が不可欠であると研究の中で感じている。子どもたちは学習した方法を使って、新しい課題に取り組んでいく。そのために、これまでに「何を学んだか」とともに「どのように考え、学んだか」の継続性が必要となってくる。発達段階に応じた取り組みを行い、学校全体で同じ方向を向きながら授業研究を行うことの大切さがこの「児童観」にはあり、子どもたちと先生たちとで積み重ねてきた学びの文脈によって生み出されるのが本時の授業であり、目の前の「その子たちにとっての授業」になるのだと思う。

さらに、授業研究で「授業づくりの視点」が共有されることにより、授業づくりの発想力が飛躍的に高まったといえる。今年度、各学年で、昨年度の研究をふまえた上での、もっと楽しい単元計画はないか、今年の学年の子たちにはどの方法がいいか、こうすれば楽しみながら学ぶ力が育まれるのではないかと検討を重ねている。子どもたちも授業者もわくわくしながら本時を過ごすことが、学力向上につながる第一歩だと感じている。

昨年度より、大阪府教育庁「スクール・エンパワーメント(SE)推進事業 国語の授業づくりモデル小学校」として研究を進めている。これまでの校内研究をより一層、学校全体で取り組むことで、新たな成果と課題を得ることができている。日々の多忙の中で、じっくりと研究に取り組む難しさはあるが、学校全体で方向性を共有しながら話し合える環境を大切に、本研究を次年度にも繋げていきたい。そして、大阪府域の学校へも成果を発信し、本校の研究が大阪の国語教育の一助となれば幸いである。

子どもたちが自ら問いをもち、課題に向かい合い、互いの違いを認め合いながら、自分自身での答えをもち、判断していけるように、これからも授業を通して人間力の育成をめざしていきたい。

〈参考文献 参考文献〉

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編 文部科学省 平成29年7月
- ・『考えの形成を促す説明文の発問・交流モデル』 石丸憲一 東京・国語教育探究の会 明治図書 2020年